第84回麻布獣医学会　一般演題2

突然の失明がみられたM・ダックスフンドの1症例

山岸　達郎[1]，志水　孝臣[2]，堀江　祐三[3]，小山　博美[4]

[1]やまぎし動物病院，[2]志水動物病院，[3]大東動物病院，[4]ネオベッツVRセンター

［要約］

突然の失明にて来院し，眼科・脳MRI・脳脊髄液などの各検査を実施し肉芽腫性髄膜脳脊髄炎と診断した7才のM・ダックスフンドに対して，ステロイド剤の投与により良好な結果を得たのでその概要を報告する。

［症例］

プロフィール	：	M・ダックスフンド，7才，未去勢雄，体重4.5 kg，毛色レッド
主訴	：	前日よりの急性両眼性盲目
血液検査	：	白血球数減少，リンパ球，好酸球減少，BUN低下
眼科検査	：	瞳孔散大，対光反射消失，盲目 軽度網膜変性，視神経乳頭浮腫，網膜電位の反応低下
脳脊髄液検査	：	蛋白質と細胞数の軽度上昇
MRI検査	：	後頭葉および視床の外側膝状体核の周囲に炎症像あり，視神経浮腫あり 眼窩・頭蓋内に占拠性病変なし，脳圧亢進なし

以上の検査所見から，肉芽腫性髄膜脳脊髄炎と診断した。

［治療と経過］

プレドニゾロン1 mg/kg　BID　POで治療開始。

翌日には視力の回復が認められた。

1週間後の眼底検査で視神経乳頭の腫脹は消失。

以後，2週間毎にプレドニゾロンを漸減していったが，0.5 mg/kg　BIDに減量した第38病日に視力の低下が認められたため，朝1 mg/kg　夜0.5 mg/kgに増量したところ視力回復。

その後も徐々に減量し，0.125 mg/kg　EODまで減量した第98病日に再度視力の低下が認められたため，0.5 mg/kg　SIDに増量。

現在（第151病日），0.25 mg/kg　EODにて良好に維持。

［考察］

肉芽腫性髄膜脳脊髄炎の原因はいまのところ不明のままである。

しかし，遅延型過敏反応の自己免疫疾患が推察され，自己免疫を抑制することによって症状改善が期待できる。

実際，今回の症例はステロイド剤投与に良好な反応を示し，臨床症状の改善が認められた。

しかし，ステロイド剤の長期的な投与が必要なこと，投与量を漸減すると再発がみられることなどから，今後はシクロスポリンやアザチオプリンなど他の免疫抑制剤の使用を考慮する必要があると思われる。